View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University. 2008, Vol.11, 49-56.

論　文

育児における女性の心理的体験に関する研究の今後

浅賀　万理江・三浦　香苗

New Foundation for Psychological Studies on Women's Experience of Child-Rearing

Marie ASAKA and Kanae MIURA

How do women experience motherhood? Many studies have reported on maternal anxieties and maternal stresses. These studies have demonstrated that psychological conflicts of mothers could be sufficient to defeat the "myth of maternal love." However, two problems remain. Firstly, these studies have not examined motherhood realistically. Secondly, these studies have been conducted based on the idea that psychological conflicts predict non-adaptive child-rearing. In this study, we have proposed the possibility that psychological conflicts about child-rearing can contribute to the development as mothers, and we have reviewed studies on this development. Such studies have resulted in the new perspective, that mothers can triumph over difficulties in child-rearing and can adapt as mothers. However, these studies have not revealed how mothers triumph over their problems, or how they adapt as mothers. As a result, we have proposed a new foundation for psychological studies on motherhood that focuses on the process of motherhood. With this perspective, we would approached the mechanisms of how women experience motherhood and how they adapt as mothers.

Key words : child-rearing stage（育児期）, development as mothers（母親としての発達）, psychological conflicts（心理的葛藤）, a review of studies（文献研究）

１．はじめに

子どもを授かり、産み育てることは女性にとってどのような体験となるのであろうか。1970年代以降のわが国において、虐待の増加, 少子化, 少年非行の凶悪化などが社会問題となり、それらが子育ての歪みとして把握されると共に、子育てをめぐる危機意識や「母性とは何か」という問題への社会的関心が高まっている（大日向, 2001）。そのような社会的関心が高まった当初から現在に至るまで、それまで子どもにのみ強い関心を向けていた心理学研究あるいは精神医学的研究においても、母親自身をその主題としたものが急増している。それらは、子どもを育てる中で母親が体験する心理的危機を数多く報告してきた。

たとえば、しばしば母親が抱える育児不安は、精神医学的文脈の中でマタニティーブルースやうつ病との関連において検討されてきた。育児不安とは、「乳幼児を抱える養育者が、育児に関連して感じる日常の些細な混乱が蓄積された結果生じた、否定的な情動、育児への制御不能感」（輿石，2005）と定義されるが、これは出産満足度の低さ（佐藤・加藤・伊藤・顧・掛江, 2008）、家庭の経済的ゆとりのなさ（山本・神田, 2008 ; Patterson & Albers, 2001）、病産院や身近な家族・友人によるサポートの少なさ（唐田, 2008）、子どもの年齢（倉林・太田・松岡・常盤・竹内，1997）、ソーシャルサポートの少なさ（Simons，Lorenz，Wu，& Conger，1993）、子どもの扱いにくい気質・親としての自己効力感（Cutrona & Troutman，1986）などと関連することが明らかにされている。

また、ストレス研究の文脈の中で母親が抱える育児ストレスについても多くの研究がなされてきた。育児ストレス研究においては、尺度作成によるストレス因子構造の検討（Abidin，1992；Crnic & Greenberg，1990；村上・飯野・塚原・辻野，2005；野口・小川・松村，2005）により、具体的に母親がどのようなストレス要因を抱えているのかが明らかにされた。また、育児ストレスに関連する要因として、①母親の要因，②子どもの要因，③育児環境や育児状況の要因などが検討されてきた。①母親の要因としては、母親の年齢の高さ（村上ら，2005）、出産満足度の低さ(関塚，2005)、特性不安の高さ（西海・喜多，2004）と育児ストレスの高さとの関連が、②子どもの要因としては、低出生体重児や扱いにくい気質とされる子どもを持つ母親ほど育児ストレスが高いこと（金子，2008）や子どもの年齢によって育児ストレスの高さが変動すること（山川・柏木，2004)、そして③育児環境や育児状況の要因としては、周囲から受けられるサポートの少なさ（Crnic & Greenberg，1990；Cutrona，1984；前田，2007)、婚姻前の妊娠(山川ら，2004)と育児ストレスの高さとの関連などが明らかにされている。さらに、日常的に体験される育児ストレスが重症のうつ病を発病させる可能性を論じたもの（Brown，Andrew，Harris，Adler，& Bridge，1987；佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994）などがある。

このような育児不安・育児ストレスに関する研究は、母親が心理的葛藤や苦悩を抱え得る存在であることを十二分に明らかにしており、これまであまりにも自明視されてきた母親の愛情(花沢，1977)というものに疑問を投げかけ、母親自身も何らかの支援を必要とする存在であるという言明を発信することにより社会的意識の変革に寄与してきたといえる。しかし、これらの研究は、依然として２点の大きな問題を残していると筆者らは考える。まず、育児不安や育児ストレスといった問題は母親となる当然の経験のごく一部であり、その点だけをクローズアップしていては母親の全体像はまだまだ見えてこないということである。「母親に関する研究量が飛躍的に増加したとはいうものの、子育ての現実的な問題にどこまで貢献しているかというと、なお課題を残している」（大日向，2001）という指摘にもあるように、母親の負の感情のみに焦点を当てた研究からは、女性が母親となることによって体験する、より複雑で現実的な心理を明らかにすることはできない。これは、育児不安・育児ストレス研究がより良い子どもの発達を強く意識した文脈の中で研究されてきたことが背景にあると思われる。２点目にこのような研究の背景には、その問題意識の出発点からも明らかのように、育児不安・育児ストレスといったものが、虐待のような、あるいは少年非行を引き起こしてしまうような不適応的養育行動に対する予測変数であるという前提があるように思われる。これは、上記の研究背景から考えても想定されることである。しかし、母親の育児不安や育児ストレスは不適応的な子育てへの予測変数でしかないのだろうか。Braiker & Kelly（1979）は、「葛藤や問題の存在は新たな発展を導く強い契機になり得る」という心理的プロセスを主張している。これを子育てという営みに当てはめてみれば、育児において母親が抱える心理的葛藤や苦悩は、育児への動機づけや母親としての発達に寄与するということも考えられるのではないだろうか。育児における葛藤を不適応的養育行動の予測変数として一方向にのみ検討するのではなく、その積極的意義も同時に模索することも必要ではないだろうか。そして、母親を主題とした研究は、子どもの発達への影響因として母親像を追うことから抜け出し、母親自身を理解するという方向へと転換していく必要があるのではないかと考える。

そこで本論では、母親となることが女性にとってどのように体験されるのかということに着目した研究や母親としての発達に関するこれまでの先行研究を概観し、今後の心理学的研究の可能性を探ろうとするものである。なお本論では日本国内における文献のレビューを行うが、それは以下の理由による。東京都福祉保健局（2003/2005）による児童虐待の実態調査によると、わが国における児童虐待を行った母親の心身の状況は精神疾患や薬物・アルコール乱用など、特に欧米で問題となるものの割合が低く、「特に問題なし」とされる割合が高くなっている。さらに厚生労働省統計表データベース（2005）によると、虐待は63.3%が実母によって行われ、そのうち47.4%が専業主婦であることから、子どもとともに過ごす時間の長い母親による虐待事例が増加していることが報

告されている。これらのことより、わが国に特有の母親になることにおける困難さがあると思われる。そこで、本論では国内において「母親となる」ことに着目して行われた研究を中心にレビューを行うこととした。もちろん、その中のいくつかは欧米にも共通なものも見られると思われるが、日本の現代の家庭で生じていることに焦点を当てたいためである。

２．母親となることによる心理的体験に関する研究

では、女性は自らが母親となることをどのように体験しているのであろうか。これについて、岡本（1996）は、育児期における女性（幼稚園児の母親）のアイデンティティという観点から検討している。具体的には、育児期女性のアイデンティティ様態を①個としてのアイデンティティの達成度と、②母性意識の高さの2次元で捉える質問紙調査を行い検討した。個としてのアイデンティティは、結婚・出産までに個の確立によって発達・深化していくアイデンティティの一側面であるとされ、一方母性意識とは「母親であることの自覚にもとづく妊娠・分娩・育児への態度や価値観」（花沢，1992）と定義され、母性意識が高ければ母親としてのアイデンティティがよく達成されていると考えている。そして、育児期はしばしばこれら２つのアイデンティティの葛藤の時期となるとして、それらがどのように統合あるいは葛藤しているのかという視点から育児期女性のアイデンティティ様態に関する４つのタイプを提示した。すなわち、Ⅰ.「統合型」（個としてのアイデンティティがよく達成され、母性意識も高いため、２つのアイデンティティがうまく両立されているタイプ）、Ⅱ.「伝統的母親型」（個としてのアイデンティティ達成度は低く、母性意識は高い。母親としてのアイデンティティが自己のアイデンティティの中心を占めており、葛藤は少ないと考えられるタイプ）、Ⅲ.「独立的母親型」（個としてのアイデンティティ達成度は高いが、母性意識が低い。個としてのアイデンティティが自己のアイデンティティの中心であり、物理的には母親でありながらその意識は低いため、４タイプの中で最も葛藤が強いと想定されるタイプ）、Ⅳ.「未熟型」（アイデンティティ達成度および母性意識の双方が低く、確立が不十分である。発達的に未熟であるがゆえの葛藤体験が起こると推定されるタイプ）の４型である。さらに、これらのタイプと家庭生活への満足感および夫婦関係との関連性を検討している。それによれば、家庭生活への満足感は、Ⅰ．統合型がⅣ.未熟型よりも、また夫の妻に対する理解の程度は、Ⅰ．統合型がⅡ．伝統的母親型よりも有意に高い得点を示しており、統合型の母親は他のタイプよりも家庭生活への満足度が高いことや、夫からの理解の程度も高いと認知していることを示唆している。一方で、夫の家事・育児への協力の程度やそれへの満足感との関連は見られず、家事・育児における夫の実際の協力という次元ではなく、より人格的次元において夫から理解されていると認識できることが、育児期女性のアイデンティティ統合を支えていると推察している。岡本の研究は、成人女性のライフコースが多様化し、子どもを産み育てること自体が選択される時代であると言われるようになった現代において、母親となる女性が直面するであろう問題の一端を体系的に明らかにした点で非常に興味深い。しかし、アイデンティティ様態の類型化に基づく母親の葛藤については想像の域を出ないものであり、実際に母親が抱える葛藤とは具体的にどのようなものなのか、どういった点において母親は葛藤を抱え、またその葛藤とどのように向き合いながら日々の育児生活を送っているのかというような母親のリアリティは、まだ明らかではない。さらに、葛藤が強いと想定されるⅢ．独立的母親型やⅣ．未熟型はどのようにしてアイデンティティの統合に向かうのか、あるいはⅠ．統合型の母親がどのようにして自らのアイデンティティ統合に成功したのかといった点については明らかにされていない。この点に関しては、女性が母親となることのプロセスを検討する研究が必要と思われる。

一方、徳田（2004）はナラティブアプローチを使った質的手法によって、育児期女性（０，１歳児の母親）の心理的体験に迫っており、上記の岡本によるアイデンティティ葛藤も包含するような研究を行っている。この研究では、育児期女性が育児経験を自らの人生や生き方との関連でどのように捉え意味づけているかを、母親になって間もない女性の語り（narrative）を通して明らかにすることを目的とし、５つの意味づけのパターン

が提示されている。パターン１は「自明で肯定的なものとしての子育て」であり、子育て経験は肯定的な感情によって語られ、自然で自明なものとして意味づけられている。現在の生活への満足感も高く、将来への葛藤や不満は語られないパターンである。パターン２は「成長課題としての子育て」であり、「修業」という言葉が使われるなど、自己の成長や変化が求められているという観点から意味づけられ、両価的な感情によって語られる。個としての生き方などとの関連での葛藤や緊張、将来の不安は語られないが、現在の生活における子育ての負担感や制約感が語られる。パターン３は「小休止としての現在」とされ、自らの肯定的変化を伴うものとして積極的に受け入れようとする一方で、将来の展望について潜在的緊張や不安が存在している。現在は、特殊で限定的であることを強調し、将来の展開を前に何かを蓄積しながら停止している時期と意味づけられる。パターン４は、「個人的成長としての現在」であり、子育ては自らを成長させるチャンスであるが、妊娠中・現在・将来において、個としての自分自身の生活空間や時間を確保することの重要性と優先性が語られる。パターン５は「模索される子育ての意味づけ」であり、パターン２と類似した「成長課題としての意味づけ」がなされるが、「自分にはできていない」という困難さが語られる。妊娠前～現在に至るまで、子どもを産み母親になることや、子どもの存在を受け入れることの困難、および現在の生活における負担感が語られる。特に、パターン２～５は子育てにおける何らかの葛藤や問題が語られた上、子育てを「学びや成長」として意味づけている点で共通している。そしてパターンの違いは、「学びや成長」に関する自己評価によって生じており、「学びや成長」という意味づけがなされる背後には、時に何らかの心理的負担や葛藤が存在していることを指摘している。さらに、徳田の研究において注目すべき点として、意味づけをナラティブアプローチの使用により「葛藤や問題をめぐる納得の方略」として捉え、各パターンにおける葛藤や問題の受け入れ方略を明らかにしていることがあげられる。すなわち、パターン２では子育てによる心理的負担を、自己の変容を求める成長課題として積極的に位置づけることによりその負担を受け入れようとしていると考えられる。またパターン３では、現在と未来とを時間的に分離させることによって、パターン４では子育てと個人の領域とを空間的に分離させることによって、それぞれ子育てに伴う潜在的緊張や葛藤を回避し、現在の状況を積極的に肯定し受け入れていると考察している。さらに、パターン２と４においては、子育てに伴う葛藤や問題が語られる一方で、子育てとは自らの成長を伴うものとして意味づけられており、このような意味づけ自体が子育てに伴う心理的負担を受け入れる方略として機能している可能性が示唆された。そしてこの研究の最大の意義は、子育てにおける心理的負担をマイナスのものとして捉えるのみでなく、それ自体が積極的な心理的適応プロセスとして有効に機能しうることを明らかにしたという点において、これまでの母親研究とは違った新たな側面を提示したということである。そして、子育てにおいて母親が葛藤やストレスを抱えてしまうこと自体が問題なのではなく、母親自身がその問題とどう向き合うかということがより重要であることを示唆したといえる。しかし、この研究は一度の面接調査を通して、ある時点の母親の状態についてのみ調査を行ったものであり、何がどのように機能して５つのパターンのような意味づけを行うようになったのか、あるいは現在の意味づけが将来の母親にとってどのような意味をもたらすのかというプロセスは明らかにされていない。この点において、岡本の研究と同様に「母親となるプロセスを追う」という課題を残していると言える。

３．親の発達を捉えた研究

3-1. 親の「何が」発達するのか

徳田の研究では、母親となることに伴う心理的負担は、子育てを自らの成長を伴うものとして意味づけることによって回避される可能性が示唆された。「育児は育自」と言われるように、たしかに親たちは育児を通して自らの積極的・肯定的変化を何らかのかたちで体験していることが想像される。

では、具体的にどのような側面において親は自らの変化を体験しているのであろうか。ここでは、育児を通して肯定的に変化することを「親の発達」と捉え、その視点によって行われた研究を概観する。

柏木・若松（1994）は、親の発達を人格的・社

会的な行動や態度における変化から捉えるため、３－５歳の幼児を持つ父母を対象として質問紙調査を実施した。それによると、①柔軟さ，②自己抑制，③運命・信仰・伝統の受容，④視野の広がり，⑤生き甲斐・存在感，⑥自己の強さの６側面において自らの肯定的変化を主観的に体験していることが明らかにされた。さらに、これらのどの側面においても父親より母親が、また有職（パートタイム勤務・アルバイトを除く）の母親より無職の母親の方が強くその変化を認識しているという。また、いずれの変化の認識も、育児における肯定的感情と正の相関を示し、育児や子どもへの肯定的感情を持つことと子育てによる人格的発達とは分かち難く結びついているとした。一方で、育児による制約感を強く抱いている母親は、柔軟さや生き甲斐における肯定的変化の認識が低いことも明らかにしている。このように親となることによる変化の認識には個人差があるが、その差を柏木らは育児への参加の程度や育児に対する感情との関連で説明している。

一方、井上・湯澤（2002）は、上記と同様の人格発達における個人差について、特定の他者（夫，子ども）に対する愛着と、一般的な対人態度としての愛着スタイルの点から検討し、育児における母親の発達を関係性の枠組みの中で捉えようとしている。これにより、「子どもへの密着的愛おしさ」（子どもといつも一緒にいたいなど）が、柔軟さ以外の全ての人格的側面に関する肯定的変化の認識に影響を与えることを明らかにした。柏木らの研究においても、井上らの研究においても、育児による物理的制約が高くなりやすい状況にいる母親ほど自らの人格的側面における肯定的変化を強く認識していることがうかがわれる。しかし、このことは単純に専業主婦が子どもと共に過ごすことを好むというように、子育てへの参加の程度が高いことが母親の人格的成長を促していると考えてよいのだろうか。この結果を前述の徳田の研究視点から再考察してみれば、子育てへの参加の程度の高さは、より育児における心理的負担感を生じさせる機会を多くすると考えられ、その負担感に対する心理的適応プロセスとして自らの成長をより強く認識しているとも考えられる。このように、親の「何が」発達するかという研究は、現在のところ定量的分析による研究が主であるが、それだけではその結果をどのように解釈してよいかということが非常に難しい課題である。

3-2.　親は「どのように」発達するのか

そこで、より有効と思われるものとして、「何が」だけではなく「どのように」発達するのかということに着目する研究視点が考えられる。

氏家・高濱（1994）は、子どもの誕生は混乱、時には危機的状況を生じさせるとして、母親になる過程をそれらの混乱や危機への持続的な適応プロセスと捉えた研究を行っている。この研究では、３人の母親の子ども誕生後の苦悩とその解消プロセスを２年間にわたって追跡し、その面接内容の記述分析を行っている。そこでは、母親たちが抱える問題はものごとのよくない側面に選択的に注目し、その結果、問題を過大視するという悪循環の中で生み出され、問題解決はものごとのよい側面に注目するにつれてもたらされていくというプロセスの個別性を重視し詳細に記述している。そして、ものごとの見方の変化が起こるきっかけやそのプロセスは、個人に特異的でありながらもいくつかの共通性を持つものであるとして、育児期女性の問題とその解消プロセスを Erikson（1989）の成人期発達のプロセスに対応させながらその共通性を以下のように示している。まず、Erikson は、成人期には、その発達課題である「世話」を通して、そのための労働を分担し、さまざまな経験や感情を共有できる親密な夫婦関係が重要になるとしている。一方、その発達的つまずきは、自己耽溺と他者の拒否あるいは儀式主義的な権威至上主義という形で表れるともしている。氏家らは、このような Erikson の示した特徴と母親たちの体験とを対応させ、成人期の発達課題につまずいた結果として自己への関心の集中や子どもや夫に対する拒否傾向（自己耽溺と他者の拒否）を理解し、感情や体験が夫と共有されていない時期、あるいは子どもや状況のコントロールに対する強い動機づけが見られる時期（儀式主義的な権威至上主義）を経る様子を記述した。しかし、問題の解消プロセスにおいてこれらの特徴が消失し、子どもへと関心を向け始め、感情や体験を夫と共有することによって夫婦間の親密さも増していくことで、母親が危機を乗り越えていくというプロセスをも明らかにしている。氏家らは、この研究により母親としてのつまずき自体がその後の母子の発達にとってネガティブな影響を残してし

まうだけではなく、母親自身がそれを乗り越え、さらによい状態になり得るという一つの道筋を示した。母親の持つ力、母親を取り巻く環境をエンパワーメントすることの意義が確認される研究であるといえよう。一方で、氏家らも研究課題としてあげているように、本研究ではその解消プロセスが何によって起こるのかを明らかにできていない。すなわち、危機に直面した際にそれを乗り越える母親あるいは夫婦と、夫婦関係を崩壊させ自らの心身の健康が損なわれてしまう場合との違いがどのように生じるのかについては検討されていないのである。

４．まとめ－今後の研究課題－

本論では、母親となった女性の心理的体験について行われてきた先行研究を概観してきた。最後に、これまでの研究の課題をまとめ、今後の心理学研究において目指されるべき母親研究の課題とそれらの意義について述べる。

1970年代から盛んになった育児不安・育児ストレス研究によって、母親自身を心理学研究の主題とすべき必要が論じられるようになり、現在では母親に対する臨床心理学的支援も心理学が大きく貢献すべき分野となっている（岩堂・松島, 2008）。さらには、1990年代に入って、育児ストレス・育児不安というようなある特定の負の状態だけに着目するだけでなく、子育てを親になる経験として捉え、そこに成人期発達の積極的意義を認めるといった視点が加わり、母親自身の体験をよりダイナミックに捉えようとする研究が漸増している。しかし、それでもなお、前述の大日向の指摘のような「母親のリアリティ」が見えてこないという大きな課題を残しているのである。氏家(1996)が指摘するように、母親の現実的な体験を理解するには、ある特定の心理状態や行動の理由を見つけることではなく、個人の心理状態や行動パターンが時間経過の中でどのように変化するのかという問題に迫る必要がある。この意味において、育児ストレスや育児不安というようなある特定の状態から引き起こされる特定の影響、あるいは育児ストレスや育児不安を引き起こすような特定の関連要因を検討しているだけでは、母親の理解において不十分であると思われる。あるいは、育児体験がある時点における親のどのような発達を促しているのかを検討することや、育児における母親の心理的体験を類型化するだけでも事足りない。母親に対する臨床心理学的支援とは、子どもの発達にマイナスの影響を及ぼすと考えられるようなマイナスの状態をいかに排除するかということだけではない。そのようなマイナスの状態と母親自身がどのように向きあい、それを乗り越えていくことができるかを共に探るものであり、そこには必ず母親自身をエンパワーメントする力動が必要となる。そして、何が母親をエンパワーメントさせるのかを知る手がかりは母親自身の体験そのものに隠れている。それは、母親になる過程でさまざまな問題に直面するとしても、そこで真に重要なのは困難をもたらす変数ではなく、それをどう体験するかという現実知覚＝評価認識である（氏家, 1996）ということに着目し、その変化の過程を明らかにすることから始まるのではないかと筆者らは考える。そこで、第１筆者の浅賀は母親となることによって体験される心理的葛藤や苦悩といった負の側面が、母親たちによってどのように体験されているのかを実態に沿って理解し、それらが母親になるという体験の中でどのような意味を持つのかということについて、母親としての発達という観点から検討する研究を目指している。これは、当然個人としての体験を重視するものであり、統計的操作によって明らかにできる課題ではなく、主に質的な調査によってそのプロセスに迫るべき問題であろう。

ところで、母親としての発達という観点から、子育てにおける負の心理的葛藤や苦悩の体験の意味を探る質的研究の意義は以下の４点があげられると考える。まず、これまでの育児ストレス研究と親としての発達研究の隙間を埋め、両者を統合的に検討することで、子育ての現実的な問題に迫り得るということである。第２に、個人の体験を重視することで、多変量分析では捉えきれない母親の体験に迫り、母親としての適応的な発達プロセスをより明らかにすることができるであろう。第３に、適応的な発達プロセスを明らかにすることで、何が母親としての適応への促進要因あるいは阻害要因となり得るのかを検討する足がかりとすることができるだろう。そして、最後にそれらは母親自身をエンパワーメントする臨床心理学的支援の可能性について新たな視点を提供するであろうということである。

日本社会を振り返れば、近代以降の社会的・政治的・経済的な要請に基づいて母性愛が強化され続けてきた（大日向，1992）。そこでは、女性が母親になるということはあまりにも当然のこととされ、実際にそこで何が起きているのかということについて私たちは実はあまり知らない。母性の再考がなされ、子育て支援も活発になり始めている今こそ、母親の内実を明らかにすることは急務であるのではないだろうか。

引用文献

Abidin, R. R. (1992). The determinants of parenting behavior. *Journal of Clinical Child Psychology*, 21, 407-412

Braiker, H. B., & Kelley, H. D. (1979). Conflict in the development of close relationships. In R. L. Burgess, & T. L. Huston(Eds), *Social exchange in developing relationships* (pp. 135-168). N. Y. : Academic Press.

Brown, G. W., Andrew, B., Harris, T., Adler, Z., & Bridge, L. (1987). Social support, self-esteem and depression. Psychological Medicine, 16, 813-831

Crnic, K. A., & Greenberg, M. T. (1990). Minor parenting stresses with young children. *Child Development*, 61, 1628-1637

Cutrona, C. E. (1984). Social support and stress in the transition to parenthood. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 378-390

Cutrona, C. E., & Troutman, B. R. (1986). Social support, infant temperament, and parenting self-efficacy : A mediational model of postpartum depression. *Child Development*, 57, 1507-1518

Erikson, E. H. (1989). ライフサイクル，その完結(村瀬孝雄・近藤邦夫，訳). 東京: みすず書房(Erikson, E. H. (1982). The life cycle complete. N. Y. : W. W. Norton & Company)

花沢正一(1977). 妊産婦の不安に関する心理学的研究　日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要，19，107-125

花沢正一(1992). 母性心理学　東京:医学書院

井上芳代子・湯澤正通(2002). 夫・子どもとの関係，対人態度が母親としての成長に及ぼす影響　心理学研究，73，431-436

岩堂美智子・松島恭子(2008). 臨床心理士の子育て支援－その理論と実践事例　創元社

金子一史(2008). 育児不安および育児ストレスに関する最近の研究動向　周産期医学，38，591-595

唐田順子(2008). 乳幼児をもつ母親のサポート状況と育児不安との関連－病産院サポートを含めた分析－　母性衛生，48，479-488

柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み　発達心理学研究，5，72-83

輿石薫(2005). 育児不安の発生機序と対処法略　風間書房

厚生労働省統計表データベース(2005). 児童相談所における虐待相談の処理件数，都道府県－指定都市×主な虐待者別.

倉林しのぶ・太田晶子・松岡治子・常盤洋子・竹内一夫(1997). 乳幼児健診に来所した母親のメンタルヘルスに及ぼす因子の検討－対象児の年齢との関連－　日本女性心身医学会雑誌，10，181-186

前田尚子(2007). 育児期女性におけるパーソナル・ネットワークの構造効果－サポート・ストレス・関係充足度－　岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要，39，37-45

村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子(2005). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析　小児保健研究，64，425-431

西海ひとみ・喜多淳子(2004). 第1子育児早期における母親の心理的ストレス反応(第1報)－育児ストレス要因との関連による母親の心理的ストレス反応の特徴－　母性衛生，45，188-198

野口純子・小川佳代・松村恵子(2005). 乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス－保育所児と幼稚園児の比較－　香川県立保健医療大学紀要，2，79-86

岡本裕子(1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究　日本家政学会誌，47，849-860

大日向雅美(2001). 母性研究の課題－心理学の研

究は社会的要請にいかに応えるべきかー　教育心理学年報，40，146-156
大日向雅美(1992)．母性は女の勲章ですか？　扶桑社
Patterson, S. M., & Albers, A. B. (2001). Effects of Poverty and Maternal Depression on Early Child Development. *Child Development*, 72, 1794-1813
佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則(1994)．育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連　心理学研究，64，409-416
佐藤ゆき・加藤忠明・伊藤龍子・顧艶紅・掛江直子(2008)．出産満足度と育児中の母親の不安抑うつとの関連　小児保健研究，67，341-348
関塚真美(2005)．出産満足度と出産後ストレス反応の関連　日本助産学会誌，19，19-27
Simons, R. L., Lorenz, F. O., Wu, C. I., & Conger, R. D. (1993). Social network and marital support as mediators and moderators of the impact of stress and depression on parental behavior. *Developmental Psychology*, 29, 368-381
東京都福祉保健局(2003)．児童虐待の実態(白書)
東京都福祉保健局(2005)．児童虐待の実態Ⅱ－輝かせよう子供の未来、育てよう地域のネットワークー
徳田治子(2004)．ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から　発達心理学研究，15，13-26
氏家達夫(1996)．親になるプロセス　金子書房
氏家達夫・高濱裕子(1994)．3人の母親：その適応過程についての追跡的研究　発達心理学研究，5，123-136
山川玲子・柏木恵子(2004)．母親の子ども・育児感情－虐待の温床としての育児不安の要因－　文京学院大学研究紀要，6，185-200
山本理絵・神田直子(2008)．家庭の経済的ゆとり感と育児不安・育児困難感との関連－幼児の母親への質問紙調査の分析より－　小児保健研究，67，63-7

（あさか　まりえ　生活機構研究科生）
（みうら　かなえ　生活機構研究科）